

# 香川大学での1年間を振り返って

香川大学教育学部 准教授 谷本 里都子（昭和63年卒）

香川大学と香川県教育委員会との人事交流により、中学校現場から母校である香川大学教育学部で勤務するようになって早1年が経った。昨年4月は、すべてが世界が違うもので驚きの連続だった。今まで授業したこともないような内容の授業をしなければならない。オムニバス形式の授業が多いため、教育法規、教育課程、生徒指導、教育相談、教育心理学、特別活動等、多岐にわたる分野での授業準備は大変だった。20人から230人規模まで、マイクを持ち、パワーポイントを駆使しての授業は、大変ながらも非常に新鮮であった。

授業をする中で学んだことが3点ある。1点目は、「学び直し」である。様々な分野の授業をする際、教材研究として要ともなる『学習指導要領』、『生徒指導提要』、文部科学省からの通知、県教育委員会発行の冊子やパンフレット等を熟読する。中学校現場では日々のことに追われ、熟読したり、小学校や高校の学習指導要領を読み比べたりする時間や気持ちの余裕はなかった。しかし、このようなことを行うことで、知らなかったことを知ったり、忘れていたことを再確認した。まさしく、「学び直し」の機会を得られたことに感謝したい。

2点目は、「他校種からの学びによる視野の広がり」である。交流人事教員は常に3人で、小学校で勤務していた教員から常に刺激を受けることができた。小学校教員の授業は説明が丁寧で、子どもの興味・関心を引く手立ても豊富で、何よりも表情が柔らかい。小学校での勤務経験がないため、小学校ならではの留意点など、多くの刺激を頂き、自分の視野が広がった。

3点目は、「大学生のよさ」である。今時の若い者は…という否定的な言葉をよく耳にするが、香川大学の学生は非常に真面目で、目標に向かって一生懸命に努力しているなあと大学生を見直した。授業にも真面目に出席し、出席票にもたくさん感想を書いてくれる。私がモットーにしているのは、学生の感想に必ずメッセージを記入することである。次回の授業の際に、自分の出席票を手にした学生が、うれしそうにメッセージを読んでもくれる。この反応は中学生も同じである。また、うれしそうに読んでいる学生の姿を見ることも好きである。一方的な授業とならないように、学生の感想を次回の授業で紹介したり、褒めたりすることで双方向性をもたせている。「～といういい意見を書いてくれてたね。」と紹介すると褒められた学生がニコッとする。やはり、いくつになっても人間は褒められるとうれしいのである。忙しく疲れていても学生がかけてくれる何気ない言葉や何気ない表情、書いてくれる感想で元気がもらえる。中学校現場にいた時も「子どもから学ぶ姿勢」を大事にしてきた。これは、大学にいても同じであると痛感した。「大学生から学ぶ」、「大学生とともに学ぶ」、そして、「大学生とともに成長する人間」になりたいと常々思っている。

このような新たな学びを得ることができたのも母校である香川大学教育学部に勤務する貴重な機会を与えて頂けたからこそである。その感謝の気持ちを学生への授業や支援という形で恩返ししたいと考えている。